

機関番号：32504

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007 ～ 2010

課題番号：19520642

研究課題名(和文) 碑文学・図像学的見地からみた古代ギリシアの外交-儀礼としての外交構築

研究課題名(英文) Interstate Relations in Ancient Greece: Epigraphic and Iconographical Studies

研究代表者 師尾 晶子 (MOROO AKIKO)

千葉商科大学・商経学部・教授

研究者番号：10296329

研究成果の概要(和文)：

本研究は、2004年～2006年度の科研費補助金による研究課題「古代ギリシアのポリスにおける碑文慣習文化に関する研究」(課題番号 16520450)の継続研究である。前研究においては、碑文文化がどのように成立してきたか、どのように展開されたかについて焦点を当ててきたが、本研究ではポリスの中心聖域に建立された大部分の碑文が外交に関わる碑文であることに注目し、とくにデロス同盟関連の碑文について決議年代の再考を含めて再検討し、それを碑文文化の展開というより大きな枠組みの中に位置づけることを試みた。

古代ギリシアの碑文文化をめぐっては1980年代末ころより研究が活発になってきており、今日まで続いている。史料の時代的な偏在、場所的な偏在から、その議論の中心は古典期のアテナイにあるが、そのうち前5世紀については、20世紀前半にはその歴史像が固められたデロス同盟研究に多くを負っている。一方、デロス同盟関連の個別碑文については、いくつかの重要な碑文の決議年代について再考を迫る研究成果が多く出されている。にもかかわらず、デロス同盟史の記述には反映されず、結果として碑文文化の研究にも反映されてこなかった。本研究では、新しい研究成果を取り入れた上で、また自身もその新しい研究動向に貢献する中で、アテナイにおいて決議碑文を建立する文化がどのような歴史的経緯の中で成立したのか、またそれがアテナイにおける外交のあり方をどのように反映したものであるのかを考察した。安易にアテナイ民主政と関連づけられてきた碑文文化をめぐり議論に警鐘を唱えるとともに、アクロポリスの変遷の歴史をふまえて決議碑文建立の文化の成立について考える必要があることを示し、アクロポリス再建事業の一つの結果として外交に関わる決議碑文をアクロポリスに建立するという文化が成立したことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：

This study is the continuing study of my last project titled 'Study of the Epigraphic Culture in Ancient Greece' (Grant-in-Aid for Scientific Research (C) (2) 2004-2006: Project Number 16520450). This study aimed at contributing to understanding the Athenian epigraphic habit from a fresh view. The focus was on the Athenian epigraphic habit of the fifth century BC. Through the reexamination of some important inscriptions such as 'the Miletus decree' and 'the Erythrai decrees', and through the careful reevaluation of old studies (particularly those published in the nineteenth century and early twentieth century) on the Athenian inscriptions concerning foreign matters, it was found that the lower dates were preferable in most cases. I proposed the date of 'the Miletus decree' to 426/5 BC and that of 'the Erythrai decree' to the mid-430s BC. The Athenian epigraphic habit, particularly their habit of erecting public decrees on the Acropolis, is thought to have developed after the 430s, that is to say, after the completion of the Parthenon. Before its completion, the number of inscriptions on the Acropolis was extremely limited. Looking around Attica, the inscriptions erected before the mid-fifth century were all concerning the religious matters. Considering these results synthetically, the followings are suggested. The habit of erecting public inscriptions concerning foreign matters (more restrictively, concerning subject allies) emerged rather late comparing to the other Athenian policy and/or rituals concerning the Delian League. Hence, it is fruitless to seek a turning point of the Delian League 'from the confederacy to the Athenian Empire' through the inscriptions. The contexts for erecting and displaying public decrees on the Acropolis should be sought from the historical circumstances of the Acropolis as well as the development of the Athenian display culture as a whole.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：古代ギリシア史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：ギリシア史、外交、顕彰碑、奉納碑、碑文、デロス同盟、アテナイ、アクロポリス、アゴラ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、2004年～2006年度の科研費補助金による研究課題「古代ギリシアのポリスにおける碑文慣習文化に関する研究」の継続研究である。前研究においては、碑文文化がどのように成立してきたか、どのように展開されたかについて焦点を当ててきたが、この中で古代ギリシアの碑文文化の特徴が決議碑文であることに注目する必要があることがあらためて明らかとなった。そこで、継続研究においては、決議碑文を中心に碑文文化を考察することとした。

古典期における決議碑文はその大部分がアテナイから発見されている。しかしながら、前5世紀の碑文については、碑文の決議年代も不明なものも多く、さらに年代をめぐって論争の続いている碑文が数多くある。近年、とりわけここ2,30年の間に大きく進展した碑文文化をめぐる研究成果を取り込みながら、これらの碑文の決議年代を再考し、全体として20世紀前半からほとんどその歴史像が変わっていないデロス同盟研究の新たな進展に貢献したいとも考えた。

2. 研究の目的

(1) 2004年～2006年の科研費補助金にもとづく上記研究においては、墓碑や境界標を除いて、碑文の大部分がポリスの中心聖域に建立されたことに注目し、奉納碑としての意味と実用としての意味との二重性を説いた。本研究では、外交関連の決議碑文に焦点を当て、碑文の建立という行為から、当該国、また当事者間の関係を読み取ることを試みた。顕彰、また反乱鎮圧の事後処理というラベルを貼られている碑文の内実を再検討し、碑文文化の中に位置づけることを研究の目的とした。

(2) アテナイにおいて、決議碑文を建立す

るという文化が成立したのは、一般に前5世紀半ばと考えられてきた。そしてそれはアテナイ民主政の成立と結びつけられて議論されてきた。しかしながら、前5世紀の決議碑文の多くは決議年代が不明であり、しかもその多くについて、決議年代をめぐる論争が展開されてきた。碑文文化をめぐる研究では、論争のある決議碑文について、碑文学的考察を加えることなく、前450年ころから前440年代ころの決議と考える通説が受け入れられ、その議論が展開されてきた。その結果、アテナイの碑文文化は、アテナイ民主政のたまものとして特異な位置づけをされることとなり、このことが他地域、他の時代との比較を難しくしてきた。

決議年代をめぐる近年の論争において、いくつかの碑文の決議年代は、前420年代、あるいはそれよりも新しい時代に置きかえられつつある。だが、現在まで、そうした研究成果を取り入れた碑文文化の研究はあらわれていない。こうした新しい研究成果を見据えた上で、アテナイにおける碑文文化の成立の時期を再考し、その上で決議碑文を聖域に建立するという行為の意味について再考することが、今ひとつの研究の目的であった。

(3) 以上のような視角からは、デロス同盟におけるアテナイの支配のあり方について、決議碑文の有無からその時期を推し量るというこれまでの思考枠組みについても再考をはかることになる。この点についても明確に指摘し、20世紀前半以来、枠組みの変わることのなかったデロス同盟研究に対して新しい視角を提案する、ということさらなる研究の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 個別の碑文の検討。

無批判に総論を振りかざさぬためにも、扱

う決議碑文について、テキストだけではなく、モニュメントとしての碑文を検討することが必要である。同時に、碑文の決議年代をめぐる論争のあるものについては、一つ一つ研究史を確認していく作業も必要である。その際に、より詳細な碑文の建立場所を推定すること、碑文の大きさや形態上の特徴にも注目することから、碑文の内容についての再検討をおこなう手法も試みた。時に碑文の上部に添えられるレリーフの検討も重要な項目の一つと言える。こうした手順を踏むことで、デロス同盟研究を碑文文化という側面から捉えなおすための素材が整理された。

テクニカルな面については、単に現地で実物を見る、拓本をみるというだけではなく、現地の専門家の助言も仰ぎ、独りよがりにならないよう努めた。また、国内のみならず、海外にも発表の場を求め、できる限り多くの専門家と議論を交わすことにも努めた。国内においては、歴史家のみならず、美術史、考古学を専門とする研究者の前で発表することを心がけ、レリーフの扱い、またトポグラフィの扱いについての助言を受けた。

(2) 民会決議碑文の主要な建立の場であったアクロポリスの景観の変遷にも注意を払い、決議碑文を建立するという習慣が成立する歴史背景について再検討することを試みた。ここでは、前447年からはじまるアクロポリス再建事業という物理的な状況を無視して、アテナイ民主政の行政システムの展開との関わりからのみアテナイの碑文文化の展開を語ってきたこれまでの研究に疑義を唱え、あらためて物理的な状況から碑文文化の再検討をおこない、どのような新たな知見が得られるか考察した。

この視角からの検討においても、単独で現地を見学するのではなく、美術史、考古学を専門とする研究者と現地を検分することを試みた。

(3) デロス同盟のみならず、幅広い時代と地域にも目を向けることから、従来のデロス同盟をめぐる議論に終始し、碑文文化をめぐる議論を無視したものにならぬよう注意を払った。

第一に、古代ギリシアの書承文化全体の中で、決議碑文の建立の意味を捉えるために、碑文以外にどのような場で書承文化が展開されていたか、碑文とそれらとの間にどのような相互関係が見られるかという点に目を向けるよう心がけた。とくに陶片追放に用いられたオストラコン、呪詛板との比較を試みた。

第二に、前5世紀に成立した碑文文化がその後どのように展開していったかについて、ヘレニズム時代まで敷衍してみることを試

みた。何が引き継がれ、何が変化していったのか、その展開を考察することから、碑文文化の特徴を明らかにしようとした。

4. 研究成果

(1) 個別碑文の検討については、とくに「ミレトス決議」と「エリュトライ決議」について詳細な検討をおこなった(学会発表①⑥)。

前者については、決議年代に関しては、現在ではかつての通説はほぼ否定され、前426/5年という説が受け入れられつつある。しかし、その歴史背景と決議内容の特徴については、通説と変わっていない。報告では、通説の歴史像に再考が必要であることを指摘した。すなわち、レリーフを抱いているという碑文の形態上の特徴からも、また特定の人物ではなく、起草委員が議案を提案しているという状況からも、アテナイからの一方的な反乱鎮圧後の制裁措置を規定したものと考える通説に対して再考が必要であることを明らかにした。

後者は、現状ではほぼすべての研究者が前453/2年の決議としている碑文であるが、アクロポリスの当時の状況から考えても、デロス同盟に関する他の碑文との関係から考えても、前430年代と考えるべきであることを提案した。「エリュトライ決議」の決議年代についての論考は、早い段階で口頭報告をもとにした英文論文が刊行される予定である。

(2) アクロポリスの景観の変遷と、それにとりなう碑文文化の展開をめぐっては、論文②⑤にその成果を発表した。

論文⑤では、アクロポリスへの奉納慣行のあり方の変遷を論じ、その変化の背景に決議碑文を建立するという文化との関係が垣間見られることを論じた。

論文②においては、アクロポリスが決議碑文の建立の場となった時期について問い、従来指摘されてきたアテナイ民主政の成立と決議碑文建立の文化の成立を直接的に結びつけることはできないということを指摘した。さらに、執筆過程で、碑文文化について考察する際に、碑文断片の発見場所についての記録とアクロポリスの歴史の変遷とをつきあわせることが碑文文化について考える際に重要であることも明らかとなった。

(3) より長いタイムスパンからの考察は、論文①④⑥などで試みた。

論文①では、書承文化の普及において、名前を書き記すということがどれほど重要なファクターであったか、その習慣が決議碑文の記載習慣の中に引き継がれているかを明らかにした。

論文④では、オストラコン、呪詛板につい

て同様の視角から捉えなおすとともに、そこで用いられる人名の格（主格か対格かなど）とその背景にひそむ主体と客体をめぐる感覚について論じた。この問題は決議碑文についても追求する価値があると考えられる。

論文⑥では、顕彰決議を手がかりにしながら、碑文文化からポリス文化のあり方をどれほど浮かび上がらせることが可能であるかを考察した。

全体として、(1) デロス同盟関連碑文の決議年代の見直しが全面的に進められつつある現状において、決議碑文建立の文化の成立時期について、見直しが必要であること、(2) それにより、アテナイ民主政と決議碑文建立の文化を単純に結びつけて考えられないこと、(3) デロス同盟関連碑文の有無によってアテナイのデロス同盟国支配の強弱を論じられないこと、(4) 20世紀前半のデロス同盟間にもとづく前5世紀のアテナイ史の叙述は見直すべき時期に来ていること、(5) 決議碑文建立の文化の展開については、祭礼関連碑文の出現が、外交関連碑文の建立に先立っていることから、儀礼的な側面から考える必要のあることを明らかにした。

なお、本研究の成果として、今後も数本の論文と本の出版が予定されている。

5. 主な発表論文等 (研究代表者は下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

- ① Akiko MOROO, 'How did People Enjoy Epigraphic Culture in Ancient Greece? Inscribing Names on Monuments,' Proceedings for the International Congress for Asian and North African Studies (ICANAS) 38 (Ankara) (in processing)
- ② 師尾 晶子「決議碑文の建立の場としてのアクロポリスの成立」『パルテノン神殿の造営目的に関する美術史的研究』2011 153-165 (査読なし)
- ③ 師尾 晶子「2010年度発掘調査によるトロス教会聖堂出土碑文の概要」『史苑』(査読あり)(印刷中)
- ④ 師尾 晶子「文字と社会」『西洋古典学研究』58 (2010) 95-102 (査読あり)
- ⑤ 師尾 晶子「古代ギリシアの石碑-関係性の記録と記憶の共有」『歴史学研究』859 (2009) 144-152 (査読あり)
- ⑥ 師尾 晶子「ポリスの連続性と展開」『西

洋史学』234 (2009) 50-54、58-60 (査読あり)

- ⑦ Akiko MOROO, The Parthenon Inventories and Literate Aspects of the Athenian Society in the Fifth Century BCE, KODAI 13/14 (2003/4) [2007] 61-72 (査読あり)

〔学会発表〕(計6件)

- ① Akiko MOROO, 'Three Mysterious Inscriptions concerning Erythrai: IG I³ 14, 15 and 16,' The Athenian Empire: Old and New Problems, Conference in Honour of H. B. Mattingly (21st May 2010, Athens Greece)
- ② 師尾 晶子「文字と社会」日本西洋古典学会第60回大会シンポジウム「文字の力」基調報告、2009年6月6日、一橋大学
- ③ 師尾 晶子「古代ギリシアの石碑-関係性の記録と記憶の共有」2009年度歴史学研究会大会、2009年5月24日、中央大学
- ④ 師尾 晶子「ポリスの連続性と展開-エヴェルジェティスムの側面から」日本西洋史学会第58回大会古代史部会小シンポジウム基調報告、2008年5月10日、島根大学
- ⑤ Akiko MOROO, 'How did People Enjoy Epigraphic Culture in Ancient Greece? Inscribing Names on Monuments,' The International Congress for Asian and North African Studies (ICANAS) 38 (12th September 2007, Ankara Turkey)
- ⑥ Akiko MOROO, 'A Reconstruction of 'the Regulations for Miletos', IG I³ 21: Toward Dating to the 420s and Proposing its Historical Context,' The 13th International Congress of Greek and Latin Epigraphy (4th September 2007, Oxford U.K.)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

師尾 晶子 (MOROO AKIKO)
千葉商科大学・商経学部・教授
研究者番号：10296329